

平成28年10月12日

特別養護老人ホームぬくもり山王  
主任作業療法士 渡邊 学

「背面開放端座位」を獲得したことによる移乗能力の改善について

## 1. テーマ

臥床傾向の強い入所者に対し「背面開放端座位」を獲得したことで、移乗能力の改善及び食事動作の向上が図られた一事例

## 2. 概要

### ①実践の概要

覚醒意識レベルが低く不穏症状のある入所者(以下本事例という)に対して、人は座位を保持することで自律神経系が活性化し覚醒意識レベルの向上が図れるというエビデンスに基づき「背面開放端座位」の再獲得に向けて機能訓練を実施した。本事例は座位保持に必要な運動学・生理学的要素に課題があり、機能訓練の必要性があった。今回、座位保持の再獲得が図られたことで、移乗の改善や食事動作の向上に一定の効果が認められた。そのことから、覚醒意識レベルが低く不穏症状があっても積極的に起こしていくケア対応も有効であることを実証できたと感じた。

### ②実践の具体的な取り組み内容

#### 【きっかけ】

本事例の食事場面評価時、右手で箸操作ができる程巧緻性が高い割に食べこしが多く見られた。その要因の一つはリクライニング車椅子背もたれが後方に位置しており、食べる姿勢がのけぞり本来の食べやすい姿勢を保てていなかった点だった。早速、本事例の車椅子の変更を検討したが臀部の褥瘡の痛みや体を突っ張る為、座位が保てずすり落ちてくると介護職から話があった。そこで、機能訓練の立場からすり落ちない姿勢を再獲得できないかと思ったことがきっかけだった。

#### 【事例紹介】

男性80歳、平成15年認知症、平成24年12月脳内出血後遺症で左片麻痺を呈しており、日常生活自立度は寝たきり度B2、認知症度IVだった。臥床傾向が強く日中もリクライニング車椅子に座りながら寝ていることが多かった。ADLは食事のみ一部介助でそれ以外はほぼ全介助レベルだった。

#### 【職員体制・役割分担】

個別の機能訓練は作業療法士が担当した。また、日常生活の場面では居室担当の介護職員が中心となり背面開放端座位の保持やその姿勢で食事が摂取出来るように介入した。

#### 【目標や取り組みのポイント】

本事例が座位を保ち食事の自立度が向上する点と小柄な体格の介護職員や新人介護職員でも安全安楽に本事例を移乗介助できる点の二つを目標に挙げた。

#### 【実践上の工夫】

本事例は機能訓練を必要なものと理解することが当初難しかった為、本人にとって

訓練が気持ち良いものだという快刺激を常に入れるように配慮した。また、介護職員が訓練をケアの場面で実践することを想定し、訓練内容を起き上がりから移乗動作の流れに沿ったシンプルなものに設定した。具体的には体幹に分節的な動きが入るように寝返り訓練と端座位保持訓練を実施した。

#### 【他機関との連携】

作業療法士は機能訓練を実施し、介護職員には車椅子座位姿勢の耐久性や姿勢の変化が覚醒レベル・認知機能への影響についての観察を依頼した。また、看護師と栄養士とは褥瘡について、除圧についてと栄養管理について相談検討を行った。

### ③実践過程における課題及び評価方法

#### 【課題】

股関節等拘縮が進んでおり、運動パターンが本来の座位に必要な屈曲が作れず逆の伸展パターンが強く見られ、座位保持が簡単には作れなかった点と認知機能の低下から訓練の指示理解が困難で作業活動を使った訓練がスムーズに進まなかった点。

訓練後、座位が保てず車椅子からずり落ちそうになり、その度に介護職員側に不安を抱かせ、訓練に対して賛同が中々得られなかった点。

#### 【評価方法】

関節可動域、長谷川式簡易知能評価スケール、端座位での行動観察や ADL 場面で評価した。

### ④評価を受けての改善

背面開放端座位が再獲得され、端座位保持が可能になり、移乗も本人の協力が得られるようになった。また、食事姿勢は改善し食べこぼしが少なくなった。認知機能面は大きな変化は見られなかったが、訓練後発話量が増える場面が見られ、RO 参加時に体操の模倣が若干可能になった。

#### 【考察】

黒木ら<sup>6)</sup>は背面開放座位姿勢が背面密着座位と比べ自律神経系の活性化すると述べている。これは覚醒意識レベルの中樞が脳幹網様体に存在し、座位保持を保つために姿勢反射が働き、体を倒れないように常に調整している。この反射の中樞が脳幹にあり、因って背面開放座位を保つことが姿勢反射を働かせ、その影響で脳幹網様体が活性化し覚醒意識レベルの向上につながると考えられている。本実践では覚醒意識レベルが低く不穏症状を呈する。そのため、職員の目の届く範囲で臥床して過ごすケアの方針がとられていた。しかし、前述のとおり臥床することで覚醒意識レベルは低下することが予想され、結果不穏症状が強くなりさらに寝てもらう負のスパイラルに陥っていた。そこで背面開放座位をケアの中で取り入れよとしたが、股関節や下肢拘縮や伸展してしまう動作パターンにより座位保持が難しかった。

機能訓練の立場から体幹に刺激を入れ分節的な動きが入るように姿勢制御ができるベースを作った。雨宮ら<sup>7)</sup>は足底を床にしっかりつけることで圧感覚情報が姿勢の安定に働くと述べている。足部下肢に体重が乗るように

### ⑤今後の取り組みの方向性について

リハビリの専門職が機能訓練を行うことで座位保持が可能になり、そのことで移乗や食事などのケアの質が向上すれば機能訓練と介護職との連携がさらに発展していくと思われる。